

ゲルマニスティクとナチズム

濱 崎 一 敏

Germanistik und der Nationalsozialismus

Kazutoshi HAMASAKI

は じ め に

西ドイツの文芸学においては、第二次大戦後、ハイデッカーやシュタイガーの作品内在的な解釈学が支配的であった。文学研究は、60年代の後半に至ってガーダマーやフランクフルター・シュレーレの影響のもとで、作者作品読者を取り巻く社会と時代的要素との関連を視野に入れるようになる。しかしそれは方法論の問題として、実証主義、精神史的な生の哲学そしてマルキシズムのあらゆる基本傾向をもったうえで、それらが個々に細かく分散してゆく多元主義の時代に入る動因ともなった。例えば、文学社会学という分野が生じ、これにも経験主義的実証主義的なものとマルキシズムとがあって、これらがまた個々に分かれるといった具合である。

ハイデッカーの形而上学的な文学解釈もシュタイガーの解釈学も、ナチズムの文芸学がかつて時代と社会を集約する政治的な現実、すなわちヒトラーの第三帝国という国家との理論的な統合化によって成立したその過去から逃れようとする現象であって、それは戦後のあらゆる領域の社会的な風潮の一つを代表するものであった。

文学研究のこのような推移の中で、ドイツ・ファシズム（ナチズム）文学研究の主なものは、社会科学領域のファシズム研究などからははるかに遅れて60年代初頭になってやっと始まる。その先駆的役割を果たしたのはフランツ・ショーナウアーの「第三帝国のドイツ文学」（Franz Schonauer: Deutsche Literatur im Dritten Reich. 1961, 邦訳福村出版1972）であった。この本は、一連のラジオ講座をまとめたもので、グローバルな一面角性を払拭し切れてはいない、

あるいは史実の検証に間違いがある、という理由で種々の批判を浴びたが、それ以後ナチズム文学の研究は、数人の主な研究者たちを輩出しただけで70年代の中頃から再び急速に下火になってゆくのである。

しかも、戦後西ドイツにおいては、かつて評判を博したナチ作家たちの新版が次々と発行され読み続けられていると言う。

日本のゲルマニスティクは、ドイツにおいてヒトラーが政権を掌握した1933年以後敗戦に至るまでの間、当時のナチスドイツのゲルマニスティクを鏡のように素直に反映して、コルベンハイヤー、グリム、ヨースト、グリーゼ、ビンディング、シューマン、ベーメ、フォン・シーラッハなどのナチス作家詩人たちを高く評価しこれらの作家作品研究に専念した。翻訳にも勿論多くが従事した。文芸理論家のリンデンやキンダーマンが頻繁に研究のテーマとなった。ゲーテでさえナチズムとの関連で論じられた。しかし、敗戦後日本のゲルマニスティクは今日に至るまで、ほとんどドイツ・ファシズムの文学に関わることがない。「国外亡命の文学」や「抵抗の文学」、そして「国内亡命の文学」に眼を注ぐことがあっても、ナチスの「血と土の文学」、「戦争賛美文学」、「歴史文学」、SA及びSSの「青年隊」(junge Mannschaft)と「党の文学」に眼を凝らす者はない。敗戦後44年を経た現在まで、ナチズムそのものの文学解明に情熱を示したのは、わずかに池田浩士著「ファシズムと文学 ヒトラーを支えた作家たち」(白水社1978年)の一冊に過ぎないのである。

何故こうなのか? と問う過程が「私」の職域としてのゲルマニスティクの感動を問い返す過程でもある。

日本のゲルマニスティクが今日、せいぜい「国内外亡命」に多くの関心を寄せ「抵抗」の有様を分析の対象とするのも、恐らくはこれもまた概して西ドイツのゲルマニスティクの忠実な反映であるのだろう。この整理が正しければ、解明すべきはまずは、西ドイツのゲルマニスティクは何故こうなのか? という問題である。

本論はまさにこのような問題意識に基づいている。

I. 大戦後のゲルマニスティク

大戦直後のドイツの状況は、「皆伐」ないしは「零」の時と評される。文芸学領域においても空白(tabula rasa)が支配した。50年代に至って文芸学は、

息を吹き返したように顕著な活動を開始する。この時代に Martin Heidegger が「存在と時間」(Sein und Zeit. 1927)と並び「芸術作品の起源」(Der Ursprung des Kunstwerkes. 1949)を書き、Wilhelm Dilthey の精神史的方法に相通じながら、形而上学的な芸術把握の試みを提示し文学研究に大きな影響を与える。60年代には、Emil Staiger (「解釈の方法」Die Kunst der Interpretation. 1955) が代表する作品内在的な解釈が、一方では作用史理論の立場から Hans-Georg Gadamer (「実相と方法」Wahrheit und Methode. 1960)により、そしてまた他方フランクフルター・シュレー(Adorno, Horkheimer, Habermas)によって問い直される。いずれの立場も、文学及び文芸学の歴史的、社会的、イデオロギー批評的な側面に関心の中心に据えていたのである。

Staiger の解釈学は、Dilthey や Heidegger の「実体の直観」(Wesensschau) という認識論に基づく作品解釈の方法に、当時西欧において流行したフォルマリスムスを融合させたものであったから、この意味ではかれの方法は、戦前以来の伝統をそのまま受け継ぐものであった。批評的な合理性と科学的な分析思考、すなわち啓蒙主義に對置して、ロマン主義の「実体の直観」に優位な先入見をもったという意味では、Gadamer の場合もまた同様であった。

このように考えると、西ドイツの文芸学は第三帝国期(1933 - 1945)の体験を契機として、ナチズムへ合流していった自らの過去の伝統を、戦後何等かの形で刷新ないしは克服できているのだろうか、という強い疑問が湧き起って来る。具体的に、文芸学の一分野である文学史の叙述において、戦後「その新たな実践は、まず実証主義の文学史叙述という古い模範に向かうことであった。歴史科学研究の方法及び認識目的は、さらにそれ以後も論議されずじまいであった。20年代の Dilthey 研究の受容によって特徴づけられた解釈学的意識も、生産的な発展をとげることはなかったので、方法論の基礎研究は中断してしまった。」⁽¹⁾ と言うのである。すなわち、戦後の文芸学は、新たな方法論の基礎を確立できないまま Wilhelm Scherer の実証主義や Dilthey の精神史的方法に回帰せざるをえなかった。他方、これらとは異なった基盤に立ってフランクフルター・シュレーのマルクシズムが、ナチズム批判の思想的な個々の多様な展開を見せているのは周知の通りである。1945年以後の西ドイツの文芸学は、このようにして、60年代後半以降には増々「方法論の多元主義」(Methodenpluralismus)に陥るという結果になった。⁽²⁾

文芸学のこのような戦後の展開を背景として、Karl Otto Conrady (1926 -) は1964年10月「ツァイト」紙に次のように書く。

「…… 19 世紀の開花期当初以来、ゲルマニスティクには、民族主義的国家主義的思考が人生行路のはなむけとして贈られた。……その諸々の結果について卒直厳密に論議する勇気を、学究的なゲルマニスティクはついにもつべきであろう。これこそが、ゲルマニスティクの会議にとっては、絶えず新たに逸品ぞろいの作品ばかりに解釈をほどこし、ゲルマニスティクの何処から何処へという問いからは頑固に身を避けながら、学問性という美名のもとに当りさわりのないテーマを取り扱っているよりは、はるかに重要な課題である。そのための時は、もうとっくの昔に熟している。わずかな勇気さえあればよいのだ。」^[3]

ドイツのゲルマニスティクが19世紀当初から自律的な展開をたどり、自然にナチズムへ解け込むことになった歴史的過程を明確にしてこそ、今後のゲルマニスティクの方向づけが明らかなものとなる、という主張を、かれは1966年にミュンヘンで開催された学会の講演で再び行なう。Conradyと共に従来のゲルマニスティクを批判したのは、いずれも40才代のEberhard Lämmert (1924 -)、Walther Killy (1917 -)そしてPeter V. Polenz (1924 -)であった。かれらの批判を直接あびたのは、戦前・中・後を通じて大きな影響力をもっていたゲルマニスト、H. Brinkmann, H. Cysarz, G. Fricke, H. Kindermann, F. Koch, J. Nadler, K. J. Obenauer, H. Pongs たちである。かれらはかつてナチズムに受動的に集約されていったというよりもむしろ、自らナチズムを招来する役割を、研究教育の両面で積極的に担っていたのである。

「ドイツの文芸学と第三帝国」と題するConradyの講演は、Heideggerが実存主義的な形而上学によって、そしてまたStaigerがフォルマリスムスに基づき、政治、社会経済、宗教そして心理学的な作品成立の諸前提をすべて捨象しながら、芸術作品の実体を「存在の実相」(Die Wahrheit des Seienden)の顕現として、あるいは言語芸術作品を、詩文学として成立開示せしめている本質を内部に具備するものとして、いずれの場合も作品内在的な研究に没頭していったこれらの戦後の傾向に関し、その原因を次のように三点にまとめている。^[4]

① 精神史的構成作業に対する反動、② 国家主義教育学の価値基準による支配に対する反発、③ 第三帝国が政治イデオロギーに巻き込まれていったことから逃避するための、願ってもない手段。

①の点についてConradyは、講演の中で具体的にHeideggerとStaigerに言及しているわけではない。従って、Conradyが「精神史的構成作業に対する反動」と簡略に述べた部分には、あるいは一つのテーマとして、多々検討されるべき内容が含まれている。戦後50年代及び60年代のゲルマニスティクが、

作品内在的な研究に専念したのは、単に Dilthey 以後ナチズムへ通底してゆくという結果を生んだ精神史的方法に対する反動であるとは即断し切れないものがある。残るのである。「実体の直観」という認識論の次元においては、それらは 20 世紀初頭以来の、ないしは 19 世紀初頭の Friedrich Schleiermacher (1768 – 1834、「心理学的解釈学」eine psychologische Hermeneutik) 以来のドイツの文芸学の伝統に基づくものと考えられるからである。戦後の作品内在的研究は、精神史的方法に対する反動を企画しながらも、これを完結することはできなかった。方法の基本的な部分において、伝統へ回帰ないしは伝統を継承せざるをえなかった。作品内在的な研究を目的とした文芸学は、ナチズムからの逃避ではあっても、ナチズムを正面から問い返す作業ではなかった。このような文脈で考えると、戦後から今日まで西ドイツの文芸学がドイツ・ファシズムの文学研究に従事する意欲を左程もっては来なかったという理由も、おぼろげなところから次第に輪郭を伴って鮮明な姿を現わして来る。同時に、ドイツのゲルマニスティックがナチズムに加担していった歴史的必然的な展開もまた、想像をはるかに越えるような歴史的な根深さに基因しているように思われて来るのである。

ドイツの文芸学は、一貫して伝統的な認識論と方法論に基づき構築されており、少なくとも Lämmert や Conrady たちが 1966 年にゲルマニスティックの歴史の総体を批判的に問い直すまでは、その主な潮流の中で、ナチズムに至った経過を念頭におきながら批判的な論議がなされることはなかった。この意味で、ミュンヘンの学会は画期的なものであった。ドイツの文芸学の根深い伝統を根底から問い直した画期的なものであったが故に、それ以後の西ドイツの文芸学は、より一層多元主義に陥り分散してゆくことにもなったのである。

Dilthey の精神史的方法は、Fritz Strich と Rudolf Unger の二人を主な代表者として継承され、ヴェルサイユ条約後のかれらの文芸学は、感情と直観を用いてドイツ民族の本性を文学作品の中に見出し、これを国民構築の力として教育の中で活用しようと試みることになった。この方法は漸次第三帝国におけるゲルマニスティックの政治化に具体的に貢献することになる。このような誤った過去の歴史から逃れるべく戦後の文芸学が、文学作品自体の内在的な価値のみにこだわり、作品を取り包んでいる時代や歴史、政治や経済には眼を閉じて来たというのも、そのいきさつからすれば理解できない事柄ではない。しかし、この姿勢と方法は、現在に至るまでドイツ・ファシズムの文学研究という領域を、層の厚い重厚なものに育てることができなかった原因ともなっている。そ

してまた、当然の帰結として、戦後の西ドイツにおいては、かつてのナチズム文学が再び店頭に並べられ、疑いと批判にさらされることもなく読み継がれる、という状況を生むことになった。

ドイツ・ファシズム文学研究の研究史を、筆者の知るところ唯一詳細に手際よくまとめた Klaus Vodung 著「民族的国家主義的そして国民社会主義的文学理論」(1973)の中で Vodung は、戦後比較的大きな研究としてこの対象に関わった者の数は、1961年 Franz Schonauer がラジオ講座「第三帝国の文学」を公刊して以来半ダース以上を出ないと述べて、Rolf Geißler, Albert Schöne, Ernst Lowey, Günther Hartung, Uwe-Karsten Ketelsen そして Ernst Keller の6名の名前を挙げているに過ぎない⁽⁵⁾。以来16年を経た現在もなお、この状況に特別な変わりはないのである。

戦後40年代から50年代にかけて文学の代表者たちと見なされた者の中には、Benn, Jünger, Wiechert, Bergengruen, Carossa, Schröder といったかつてのナチ迎合作家たちが入っており、それ以後にもファシズムの古典作家たち、Grimm, Kolbenheyer, Griese, Blunck, Johst, Vesper, Player, Dwinger の新版が重ねられ、西ドイツの復古傾向は著しく、ネオナチの戦争文学や弁明文学までもが登場していると言う。⁽⁶⁾ このような現象は、しかし、西ドイツ社会の復古もしくは右傾化傾向という世の一般的風潮として片づけられる以前に、西ドイツのゲルマニスティクが、ファシズム文学研究に専念しその要素と機能を摘出提示するに充分ではないという問題をわれわれに提起しているように思われる。

Ⅱ. 「ドイツ学の伝統」

Jacob Grimm (1785 - 1863) は、ドイツ語学の基礎とされている「ドイツ文法」4巻 (Deutsche Grammatik. 1819 - 1837)、ドイツの「古代法律」(Rechtsaltertümer. 1828)及び「ドイツ神話」(Deutsche Mythologie. 1829)を書いたが、かれのゲルマニスティクはこのようにゲルマン語の言語段階の研究に留まらず、法制史や宗教風俗にも及んでいた。文学以外の文献からもドイツのポエジーがもつ精神、すなわちドイツの本性を抽出しようというのがかれのゲルマニスティクであって、それは研究対象を幅広く拡大した「ドイツ学」(Deutsche Wissenschaft)を意味していたのである。⁽⁷⁾

Grimm より一世代前の Johann Gottfried Herder (1744 – 1803) もまた、当時ドイツが国としては不統一で諸邦に分散したまま、ギリシャやフランス文化から強い影響を受けていた時代状況を反映して、ドイツ語の純粋性とドイツ精神を保護しようと努めた。⁽⁸⁾ 著名な「言語起源論」(Über den Ursprung der Sprache. 1772) の他に、かれはシェイクスピア論やオッシアン論の入った「ドイツ人の特質と芸術に関するパンフレット」(Blätter von deutscher Art und Kunst)、「新ドイツ文学評論断片」(Fragmente über die neuere deutsche Literatur. 1767) を書き、ドイツ民族の特質を強調すると共に、文学は本来詩人個人からではなくてその国の民族性から生まれる、という思想のもとにドイツ民族の独自性や独創性を訴えた。ギリシャを模倣しフランス語で物を書くといった当時の風潮をかれは当然排斥した。Herder にとっては、真の詩作は民族の所産であって、真の文学は民族の本源そして声(「批評の森」 Kritische Wälder. 1769)であった。Lämmert によれば、「Herder は、かれ以後の者たちとりわけ Grimm 兄弟と同様に、文学(Poesie)を言葉の純粋な根源の状態、つまり音と意味とが一体であって真実がその通りに感覚的に把握されうところの無垢の状態、としてとらえられたので、ドイツ文学は、根源的な創造力から発する限り、ドイツ的本性について最も深い本来の真実を表現するはずであった。」⁽⁹⁾

Herder と Grimm 兄弟とが生きた 18 世紀後半から 19 世紀前半の歴史は、ダイナミックに進行していた。フランス革命、革命に対するプロイセンの対仏干渉戦争(1792 – 1795)とその敗北、ライン左岸の割譲、再び対仏戦争と敗北、そしてナポレオンによる神聖ローマ帝国の解体(1806)という時代の推移の中で、ドイツは、ほぼ 40 余りの独立した領邦国家に分散しながらナポレオンの支配下にあり、対ナポレオン戦争後のヴィーン会議(1814 – 1815)において「ドイツ連邦結成決議」をなしながらも、政治的な国として統一を達成するには程遠い状態であった。

政治的な統一を失っていたドイツ人たちが、ドイツ語という言葉に政治的社会的な統一性の象徴を見出そうとしたのはきわめて自然な納得できるいきさつであった。「民族とは、同じ言語を語る人々の総体である」という Jacob Grimm の広く知られた言葉が、当時のドイツ人たちの渴望を雄弁に物語っている。

19 世紀の末 1870 年代から世紀の転換期にかけて支配的であった方法論の「実証主義」(Positivismus)は、ドイツの文芸学においては、Wilhelm Scherer (1841 – 1886) を代表者として生み出した。Jacob Grimm の伝記作者(Jacob Grimm. 1865)であり、文学史叙述の祖とも評される Scherer の実証主義的歴

史主義の業績は、文学史領域（「ドイツ文学史」Geschichte der deutschen Literatur. 1883. Schererの死後 O. Walzel によって増補され、また J. Körner によって詳細な文献目録が付け加えられて 1928 年に完成）に限られることなく、「詩学」（Poetik. 1888. R. M. Meyer による編集）そして言語学（Grimm 兄弟の「ドイツ語辞典」の 1854 年から 1961 年に至る継続作業など）に及んでいる。歴史、宗教、言語、教育、美学、文芸批評、神学などを研究対象とした Herder とそして Grimm 兄弟以来「ドイツ学」としてこのように幅広く研究の対象を設定して来たドイツのゲルマニスティクは、Scherer に至って、他の研究領域から離れてドイツ語及びドイツ文学の研究領域として初めて分業の形態をとり独立することになる。

Scherer の文献学的実証主義は、作家詩人の伝記研究、作品批評に重点があり、作家たちと作品を取り巻く時代と社会の様相との影響関係を明らかにしようとする社会学的方法でもあった。この方法であることから、当然「ドイツ学」の伝統は継承され、ここにもそれは生き続けることとなった。このようにして、Scherer のあらゆる活動は、「国民倫理の体系」（System der nationalen Ethik）に関わる研究」であると特徴づけることができたのである。¹⁰⁹

Ⅲ. ゲルマニスティクの政治化

1871 年統一をなし遂げたドイツが、近代統一国家としての合理性をあらゆる分野で追求する若々しい態勢にあった丁度その時期、ドイツ語教師たちも「ゲルマニスト協会」（Germanistenverband）を設立する（1912 年）。その背景には、統一近代国家建設の水々しい憧憬が渦巻いていたのと同じように、Scherer によって分業形態となり、対象領域が従来よりは限定された形で成立した新たなゲルマニスティクに対する新鮮な意欲もあったに違いない。しかし、初代会長の Johann Georg Sprengel、そして協会設立時点における理念形成に大きな役割を果たした Friedrich Panzer は、後にヒトラーの政権掌握時における、ナチズムによるゲルマニスティクの政治化に深く関わることになるのである。「ゲルマニスト協会」は、ドイツと共に運命を担い、当初からナチズムへ直結してゆく言わば宿命にあった。

一次大戦の敗北と「背後からの一突き伝説」（Dolchstoßlegende）の流布、そして領土の 13 % と 600 万人の住民植民地のすべてを失い、侵略者としての戦

争責任を認めさせられ(第231条「戦争責任条項」)、多額の賠償金を課せられて、多くのドイツ人たちの間に強い被害者意識を生んだヴェルサイユ条約締結の後、「ゲルマニスト協会」は、「ドイツ教育学会」(Gesellschaft für deutsche Bildung)と改名される(1920年)。ヒトラーのいわゆるナチ党(NSDAP)が、ザルツブルグの党大会において結成されたのが同1920年である。19世紀初頭対ナポレオン戦争以来の激しいナショナリズムの高揚が社会の底流には醸成されつつあった。1925年以来刊行された学会機関雑誌「ドイツ教育雑誌」(Zeitschrift für deutsche Bildung)の初刊の序には、「あらゆるドイツの教育の目的と課題」について次のように記されている。

「それは、ドイツ人をドイツ人へ至らしめる教育であり、ドイツの個々の魂をドイツの民族魂に根付かせるものである。今日問題なのは、共同体人間の形成を目的とした教育であるばかりではなくて、自覚的なドイツ国民の形成を目的とした教育こそが重要なのである。ドイツの国家意識へ至る教育の道は、ドイツの民族意識へ至る教育を経るものであり、ドイツの民族意識へ至る教育は、ドイツの郷土意識へ至る教育を経るものである。郷土には、民族の国家的生のあらゆる神秘的な根源力が宿っている。狭隘な郷土からドイツ民族へ、ドイツ民族からドイツの国家へと進むこと、これこそがわれわれの青少年が歩むべき道のりである。」⁽¹¹⁾

Herder 及び Grimm 兄弟以来、ドイツ語を民族の結束点とみなして、ポエジーの中にドイツの特質と本性、独自性と独創性を抽出しようとして来た「ドイツ学」の伝統は、郷土、民族、国家意識の覚醒と育生を目的とするものとして、ここに明確な姿を現わすことになった。「ゲルマニスト協会」の設立以来引き継がれて来たいわゆる「ドイツ学運動」(Deutschkundebewegung)の具体的な始まりがここにある。同時にそれは、「ドイツ学」をあらゆる教育の中心に据えようとする運動でもあった(Friedrich Panzer 著「ドイツの教育の中心としてのドイツ学」Deutschkunde als Mittelpunkt deutscher Erziehung, 1922)。ゲルマニスティックは、こうして、かつての神学や哲学のように諸学の中の指導的な位置を占める傾向をもつようになるのである。

ワイマール期の20年代における「ドイツ学運動」は、Schererの実証主義を引き継いだ Josef Nadler によって、そしてまた実証主義に対する批判から生じた Dilthey(「経験と文学 レッシング ゲーテ ノヴァーリス ヘルダーリン」Das Erlebnis und die Dichtung. Lessing. Goethe. Novalis. Hölderlin. 1905)の精神史的方法を受け継いだ F. Strich や R. Unger たちによって担われ、相互

に激しい論議を呼びながら推進されることになる。その歴史的な到達点は、人種イデオロギーに貫かれた第三帝国の民族主義的国粹的な「ドイツ学」(Deutschwissenschaft - Conrady)である。

J. Nadler (1884 - 1963) は、プラハの大学において、Scherer の愛弟子の一人 August Sauer (1855 - 1926) を師として学び、「ドイツの諸種族と風土の文学史」3巻 (Literaturgeschichte der deutschen Stämme und Landschaften. 3Bde. Regensburg 1912 - 18) を主著とするが、後にナチス支配の第三帝国期に至って改訂版「ドイツ民族の文学史、ドイツの諸種族と風土の文学と著作」4巻 (Literaturgeschichte des deutschen Volkes. Dichtung u. Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften. 4Bde. Berlin 1938 - 41) を上梓する。Conrady によって「人名収集」(Namensammlung) としてしか推奨の価値はないと酷評された⁽¹²⁾ Nadler の歴史主義的文学史は、民族の種が生物学的な統一体であることを暗黙の前提としたうえで、民族の系譜と精神的な業績との間に根源的な生態学的関係を認め、これを信仰するものであった。Nadler は改訂版「ドイツ民族の文学史」においてこう書く。「国民社会主義的作品の信仰と意志と秩序は、民族全体からあらゆる異人種の生細胞を放逐し、根源的なゲルマン民族及び北方人種の内奥の核に、その支配権を戻し与えることにことを目標としている。」⁽¹³⁾ ここには、ナチズムに対する迎合と“異人種”(fremdrassisch)、すなわち他民族に対する短絡的な攻撃性が、露骨に表現されている。

Nadler に決定的な影響を与えたのは、その師 Sauer であった。1907 年 11 月 18 日、Sauer はプラハ大学の大講堂で、Nadler もまた聴講者の一人であったという学長就任講演「文学史と民族学」(Literaturgeschichte und Volkskunde) を行なう。そして文学史叙述の基本原則を次のように述べたのであった。

「それは、ドイツ文学史の輪郭を次のような方法で与えようとする試みである。すなわち、民族という基盤から種族と風土の分枝へ向かい、風土と種族とがその特質と相互作用において従来より以上に価値あるものと見なされ、そして、どの詩人においてもどの詩人グループにおいてもどのような文学作品であっても、それらがどれだけ深くドイツの民族性に根付いているものなのか、もしくは、それらがどれだけそこから遠ざかっているのかを見定めようとするものである。」⁽¹⁴⁾

他方、実証的な歴史主義に敵対していた Unger の歴史理論は、生の哲学に基礎づけられ、感情と直観 (Gefühl und Intuition) による認識論に立脚してい

て概念的な分析や哲学思考に信を置かない。すなわちロマン主義的不合理理論である。詩人は、より深く生を経験しこの経験の数々を創造的に表現する。従って文学作品を理解するという行為は、より深いより複雑な生の理解を可能にする。Dilthey のいわゆる「経験、表現そして理解」(Erleben, Ausdruck und Verstehen) の理論を継承した Unger によれば、「文学は生理解の器官となる。詩人は生の意味を見抜く予言者なのだ。」⁽¹⁵⁾

精神史的な方法の一翼を担った Unger にとって、Nadler の実証主義が理解できないのは当然であった。かれは、「18 世紀東プロイセン文学におけるロマン主義の準備。種族学的文学史考察」(Die Vorbereitung der Romantik in der ostpreußischen Literatur des 18. Jahrhunderts. Betrachtung zur stammeskundlichen Literaturgeschichte. 1925) において、「民族的なロマン主義と社会学的な実証主義との統合」に伴う種々の困難を挙げ、Nadler を批判する。⁽¹⁶⁾ Unger によれば、ドイツ民族の歴史的な系譜と文学の歴史を統合する種族学的文学史は、民族的なロマン主義に基づく精神史的方法以外に成就する道はないからである。

精神史とそして様式史は、「完成」(Klassik) と「無限」(Romantik) の両極を循環するという「同一物の永遠回帰」の思想に基づいた「循環歴史理論」(Zyklische Geschichtstheorie) により、精神史的方法の典型の一つとして知られる「ドイツの古典主義とロマン主義。もしくは完成と無限」(Deutsche Klassik und Romantik. Oder Vollendung und Unendlichkeit. München 1924) を書いた F. Strich もまた、「ドイツ学運動」推進の風潮の真只中、1928 年に次のように書く。「文学の根は深く地中に這っている。……と言うのも、文学は民族共同体の集積された力であり声であり、そして風土の血により育まれるものであるからである。それは時代の大きな関連の中に根付いている。文学の使命は、聖なる伝統の保持であり、その伝統を生き生きと保つ配慮であるからだ。……文学は、あらゆるものに結びついているという宗教的感情から世界の創造的な諸力が自らの中に共に流れているのを感じる……。詩人はそれ故、予見者であり予言者であり神の告知者僧侶である。」⁽¹⁷⁾

Nadler の実証主義及び Unger と Strich の精神史的方法が、20 年代の「ドイツ学運動」の中で果たしたゲルマニスティクに関する理論形成の役割を以上のように知るとき、われわれは、それらがナチズムの文学観と文芸理論の基底部分を構成するものであることに気付かざるをえない。従って、それらはナチ文芸理論と全く同一の理論だと言うことがあったとしても、それは過言にはならな

い。¹⁸ 個を民族という全体に完全に従属させたかれらの理論が、人種理論の攻撃的な排他性に転換するのは、時代と政治の具体的な要請があれば容易なことである。第三帝国におけるナチ文芸理論は、ドイツのゲルマニスティクの歴史的な展開の中から、必然的な統一性をもって形成されたものであって、戦争を目的とした一時的なショーヴィニズムによって即席にこしらえたものではなかった。精神史の方法においては、ロマン主義以来の「実体の直観」という認識論と Herder 以来の伝統概念である「ドイツ民族」とがしっかりと結びついており、実証主義の Nadler においても、きわめて自然に「ドイツ民族」と「ドイツ文学」とが相互的な関係にある。

純粋なナチ主義者たちにとっては、しかし、それでもなお 20 年代の「ドイツ学運動」は単なる「理論」に過ぎない不完全なものであった。「理論」を現実の政治の中で具体化してゆく「行動」を伴っていない、とかれらは批判する。「理論」と「行動」の統合は、観念と現実もしくは日常、そして精神と行為の一体化を意味しており、それは近代の文明の中に生きる個の断片化の再統合と克服という、きわめて現代的切実な問題を提起していた。従って、かれらの批判は、単なる政治的な運動論を越えたところで説得力をもっていた。

ナチズムが支配した第三帝国期において代表的なゲルマニストの一人であった Walther Linden は、「ドイツ学」運動の展開には歴史的に三つの段階があると総括的に述べている。¹⁹ [1] 第一次大戦までの「ドイツ学」は、基本的に素材によって規定されたものであって、むしろ「知識」(Kunde)に重点があった。[2] 精神科学的に規定され、多くの知識に全体的な関連をもたせようとしたワイマール期(1918 - 1933)の第二段階。このことによって、ドイツ学的構造主義が志向された。しかしながら、生きた種個有の(arteigen)国家的生(Staatsleben)が切り落とされたために、残念ながら「ドイツ学」は、精神的な創造領域に限定されてしまった。[3] しかし今や、国民社会主義国家は、「ドイツ学」に対し第三の段階を達成してついに「政治的歴史的な転回」(eine »politisch-geschichtliche Wendung«)を得る可能性を与えるものである。「このようにして、ドイツ学は、理念的な精神科学から政治的に血の通った生の学問(Lebenswissenschaft)となるのである。」²⁰ この場合、「生の学問」とは、国家的な生を研究対象とする学問を意味したのではなくて、研究の主体であるゲルマニストたちが民族の本性を自覚しながら民族共同体としての国家に有機的に組み込まれることを意味していた。「ドイツ学」と呼ばれてその目的と課題を明確に指示されたゲルマニスティクが、理論形成に専念する作業から脱皮し

て、生々しい現実に関わる「生の学問」となるべきだという主張を、Linden はかれの著「国民文芸学の課題」(Aufgaben einer nationalen Literaturwissenschaft. München 1933)の冒頭部分において、再び次のように行なうのである。「従って、学問は生と精神との内的緊張である。学者というのは、この緊張を最も奥深く生き抜かなければならない。学者は生と時代の外におかれてはならないのであって、かれは現実に生きているもの(das Lebendige)を生き抜き、闘い抜き、それを自己の内て越えそしてまたより高度な意味の精神へ至らなければならないのである。」^[21]

「ドイツ学」ないしは当時のゲルマニスティックが、政治的な現実に関わる直接的時間的な契機を与えたのは、1933年4月1日-2日にフランクフルトで開催された「ドイツ教育学会」であった。F. PanzerとErnst Beutlerとが主催者である。その時期は、ヒトラーが政権を獲得した(1933.1.30)二ヶ月後に当り、そしてまた、ドイツのほぼすべての大学で“非ドイツ的”な無数の書籍が学生と教授たちによって焼かれた(ベルリン大学のみで25,000冊)「焚書活動」(1933.5.10)を、一ヶ月後にひかえたナチズムによる国民革命の真只中にあった。ゲルマニスティックの政治化が、ヒトラー権力による学問の再編であったことは容易に察しがつくのである。しかしそれは、ゲルマニストたちによる自ら進んで行なう内部論理の構築でもあった。

この学会における論議の主潮は、実証的な歴史主義に対する批判であった。Conradyによれば、ナチズムの「民族的価値体系の認知は、歴史主義にうんざりしたことにも起因する」のであって、例えばPaul Kluckhohn(「現代文学の保守革命」Konservative Revolution in der Dichtung der Gegenwart. 1933)は、「相対主義的歴史主義の麻痺的作用」と述べ、Gerhard Frickeは「歴史主義の病」と呼んでこれを攻撃していたのである。^[22] Frankの「ドイツ語教育の歴史、初期から1945年まで」(Horst Jochim Frank: Geschichte des Deutschunterrichts. Von den Anfängen bis 1945. München 1973)によれば、「ドイツ学による授業の場合、膨大な知識の量を、太古の昔からドイツ人の生活に関してあらゆる領域にわたり研究し、生徒たちに伝えることが課題となったが、どんなドイツ語教師にそれが可能であったろうか? ドイツ学は方向性を喪失した歴史主義に陥り、もうとっくの昔に過ぎ去ったことを現在の生きた事柄のかわりに取りあげることには終始した。」^[23]

実証的な歴史主義は、過去に専念し現実との関わりを失っていたということ。そしてまた最も激しい批判を浴びたのは、それが価値中立的で(wertfrei)、対

象の価値判断と結びつく価値基準を生み出すことがなかったという問題であった。価値の相対主義は、とめどもなく価値の分散を招き、統一と全体を希求する反動の精神に道を開くこととなった。それは、ワイマール期の政治、経済、文化のあらゆる次元において、分裂と分散、多様化が進行し、ついには全体性を求める保守革命の波が圧倒的支配的な主潮となっていた現象と呼応するものであった。

学会の発表は、J. G. Sprengel, F. Panzer, Friedrich Neumann, Karl Viëtor によって行なわれた。²⁴⁾ Panzer は、「人は皆実証主義の価値中立的な学問にあきあきしている。再び熱狂が、民族のパトスが求められているのだ」と述べた。ゲッティンゲンの新学長となった Neumann は、「単なる知識は、常に何かしら疑わしいものだ」と言い、大学において政治的な講義 (politische Vorlesungen) が開講されるよう求めた。Sprengel は、ドイツの本性はこれまで「あまりに観察の対象であり過ぎた」、しかしそれは本来「何よりもまして意志的なものなのである」と言う。Viëtor は「行動するドイツ人」を求めた。

このようにしてゲルマニスティクは、ナチ文芸学者 Linden の主張に添い、ナチズム支配の現実完全に組み込まれ、「生の学問」として行動を起すことになる。ゲルマニスティクの行動とは、ナチズムの世界観に従った作品解釈に従事し、これをドイツ語教師たちが若者たちの教育のために用いることを意味する。作品解釈とその教授のためには、必要な研究体制が当然整えられなければならない。哲学者の Hermann Glockner は、「ドイツ学」推進母体を作り、統一的に「ドイツ学」研究を行なうこと、すべての学生に「ドイツ学」の受講と試験を義務づけること、そして、このようにして大学と中等学校及び小学校との連係のもとに、「ドイツ学」による人間教育の国民教育システムを作りあげてことを提唱した。²⁵⁾ しかし結果的にみれば、このような総合的な国民教育システムは、1945 年に至るまで実現することはなかった。大学における「ドイツ学学部」(Deutsche Fakultät) 設置も多々論議が分かれて挫折してしまった。一部プロセインの小学校から中等学校までの教育改革においてこれが実行に移され、また大学の領域では、「教育研究所」(Pädagogische Akademien) においてこの原則が普及していたと言う。²⁶⁾

「ドイツ教育学会」と並び、当時のゲルマニスティクが、意志的自覚的に政治の現実に関わってゆく有様を象徴しているのは、1894 年 Nadler の師 Sauer によって創刊された文学史雑誌「オイフォーリオン」(Euphorion) の改名である。当初この雑誌は、古典主義作家たちとその作品の理解を課題として創刊

されたものであったが、1934年ナチズムの支配下において「文学と民族性」(Dichtung und Volkstum)と改名された。新しい編集者はJulius PetersenとHermann Pongsの二人であって、表紙に掲げられた協賛者8名のゲルマニストたちの中には、ボン・ゲルマニストHans Neumannの名前もあった。

「文学と民族性」の発刊号の論文はいずれも、ドイツのゲルマニスティクが歴史的な長途の旅を経てたどり着いたナチズム体制における政治化の様相を明らかにさまでに告げている。J. Nadler著「人種学、民族学、種族学」(Rassenkunde, Volkskunde, Stammeskunde)、J. Petersenの「ドイツの伝説と文学にみられる第三帝国への憧憬」(Die Sehnsucht nach dem Dritten Reich in deutscher Sage und Dichtung)、そしてH. Pongsは「ドイツの著作物に表わされた民族の運命としての戦争」(Krieg als Volksschicksal im deutschen Schrifttum)を書いた。発刊号の序文は、この新しく生まれ変わった雑誌の性格を次のように説明している。この雑誌は、「オイフォーリオンという名前と、そしてこれと共に、ドイツの教育がヒューマンイズムの学識に適度に依存して来た在り方を放棄する。この新しい名前は、文学に関わる学問もまた、あらゆる美学的、文学史的、精神的価値をもち育む基本的な価値として、民族性を視野におさめておくことを表現している。」²⁷⁾

文学のあらゆる価値を「民族性」の一語に集約してそれを文学創造の基盤とする考え方は、Herder以降20世紀転換期の実証主義、そして実証主義にかわって主流となった精神史的方法においても決して特異な現象ではなかった。或る民族は、他の民族とは異なる国民性(本性)と思考様式を備えており、詩人はより高度な能力の個としてこの民族精神に貫かれた存在である、と考えたドイツのゲルマニスティクの伝統は、個々の方法論を規定しながら、第三帝国期ナチズムの文芸学に至るまで主流となって流れ続けた。問題として残るのはそればかりではない。この序文に見られるように、当時ゲルマニストたちが、個々の研究領域においてはそれなりの後世に残る業績を残しながらも、自らあっさり「ヒューマンイズム」を投げ捨てていることである。ヒトラーの「わが闘争」とAlfred Rosenbergの「20世紀の神話」(Der Mythos des 20. Jahrhunderts, 1930)とを引き合いに出すまでもなく、ゲルマニストたちは人道主義を排して積極的に内部論理を構築し、自らの意志をたずさえながら戦争に加担した。以後ナチズムのゲルマニスティクは、W. Linden, Adolf Bartels, Franz Koch, Heinz Kindermann, Arno MulotそしてHellmuth Langenbucherたちの人種イデオロギーによって支配される。その一人Kindermannは言う。

「われわれの国民の中で創造的に形成されるものすべて、政治的な生、社会的経済的領域、美学的そして学問的世界は、すべて民族の秩序組織の全体に奉仕しつつ組み込まれる。」²⁸

全体主義の中では、どのような「ヒューマニズム」が対抗の手段として有効なのか、という問題が「私」に残されている。

Anmerkungen

- (1) Jürgen Hauff, Albert Haller, Bernd Hüppauf, Lothar Köhn, Klaus-Peter Philippi: Metodendiskussion. Arbeitsbuch zur Literaturwissenschaft. Frankfurt am Main 1971, 1972. Band2. S. 41.
- (2) Vgl. Jürgen Hauff, Albert Heller, Bernd Hüppauf, Lothar Köhn, Klaus-Peter Philippi: Methodendiskussion. Arbeitsbuch zur Literaturwissenschaft. Frankfurt am Main 1971, 1972. Band1. S. 1.
- (3) Karl Otto Conrady: Ehrfurchtlose Germanistik? Notwendige Notizen zum Thema "Literaturwissenschaft im Dritten Reich". In: Die Zeit. Nr. 40. 2. 10. 1964. S. 22. Zitiert nach Klaus Vondung: Völkisch-nationale und nationalsozialistische Literaturtheorie. München 1973. S. 194.
- (4) Vgl. Karl Otto Conrady: Deutsche Literaturwissenschaft und Drittes Reich. In: Germanistik—eine deutsche Wissenschaft. Beiträge von E. Lämmert / W. Killy / K. O. Conrady / P. V. Polenz. Frankfurt am Main 1967. 6. Auflage, 1980. S. 84–S. 85.
- (5) Vgl. Vondung [Anm. (3)]. S. 157.
- (6) Vgl. Jan Berg / Hartmut Böhme / Walther Fähnders / Jan Hans / Heinz-B. Heller / Joachim Hintze / Helga Karrenbrock / Peter Schütze / Jürgen C. Thöming / Peter Zimmermann: Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. Frankfurt am Main 1981. S. 413. Und auch Uwe-K. Ketelsen: Völkisch-nationale und nationalsozialistische Literatur in Deutschland 1890–1945. Stuttgart 1976. S. 24.
- (7) Vgl. Eberhard Lämmert: Germanistik—eine deutsche Wissenschaft. In: Germanistik—eine deutsche Wissenschaft [Anm. (4)]. S. 24.
- (8) Vgl. Ebd. S. 11. Lämmertによれば、Herderはフランス革命の時期に「ドイツ

の普遍精神保護のための最初の愛国的研究所考」(Idee zum ersten patriotischen Institut für den Allgemeingeist Deutschlands)を書き、ドイツの著作物に保護がなされるよう研究所の設立を提唱した。

- (9) Ebd. S. 23.
- (10) Vgl. Conrady [Anm. (4)] . S. 89. Und auch Lämmert [Anm. (7)] . S. 24.
- (11) Conrady [Anm. (4)] . S. 73. – S. 74.
- (12) Vgl. Ebd. S. 92.
- (13) Josef Nadler: Literaturgeschichte des deutschen Volkes. 4. Auflage. Berlin 1941. Bd. 4. S. 213f. Zitiert nach Conrady [Anm. (4)] . S. 92.
- (14) August Sauer: Literaturgeschichte und Volkskunde. Rektoratsrede, gehalten in der Aula der K. K. Deutschen Karl-Ferdinands-Universität in Prag am 18. November 1907. Prag 1907. S. 20. Zitiert nach Wilhelm Voßkamp: Kontinuität und Diskontinuität. Zur deutschen Literaturwissenschaft im Dritten Reich. In: Wissenschaft im Dritten Reich. Herausgegeben von Peter Lundgreen. Frankfurt am Main 1985. S. 150.
- (15) Rudolf Unger: Literaturgeschichte als Problemgeschichte. Zur Frage geisteshistorischer Synthese mit besonderer Beziehung auf Wilhelm Dilthey. Berlin 1924. S. 9. Zitiert nach Jürgen Hauff, Albert Heller u. a. [Anm. (1)] . S. 37.
- (16) Vgl. Voßkamp [Anm. (14)] . S. 150.
- (17) Zitiert nach: Literatur und Germanistik nach der “Machtübernahme”. Colloquium zur 50. Wiederkehr des 30. Januar 1933. Herausgegeben von Beda Allemann. Bonn 1983. S. 237 – S. 238.
- (18) Vgl. 濱崎一敏「ナチ文芸理論における文学概念」長崎大学教養部紀要人文科学篇 第27巻第2号1987年
- (19) Vgl. Horst Jochim Frank: Geschichte des Deutschunterrichts. Von den Anfängen bis 1945. München 1973. S. 784. – S. 785.
- (20) Wather Linden: Deutschkunde als politische Lebenswissenschaft—das Kerngebiet der Bildung. Z. f. Deutschkunde 1933. Zitiert nach Frank: Ebd. S. 785.
- (21) Walther Linden: Aufgaben einer nationalen Literaturwissenschaft. München 1933. S. 2.
- (22) Vgl. Conrady [Anm. (4)] . S. 91. – S. 92.
- (23) Frank [Anm. (19)] . S. 786.

- (24) Vgl. Ebd. S. 785.
- (25) Vgl. Ebd. S. 787.
- (26) Vgl. Ebd. S. 787.
- (27) Zitiert nach Allemann [Anm. (17)] . S. 247. – S. 248.
- (28) Heiz Kindermann: Dichtung und Volkheit. Grundzüge einer Literaturwissenschaft. Berlin 1937. S. 35.

(1989 年 9 月 1 日 受理)